

松井須磨子

長谷川時雨

青空文庫

大正八年一月五日の黄昏たそがれどき時に私は郊外うしごめの家から牛込うしごめの奥へと来た。その一日二日の私の心には暗い垂衣たれぎぬがかかっていた。丁度黄昏たそがれどきときのわびしさの影かげのようにとぼとぼとした気持ちで体ていをはこんで来た、しきりに生せいの刺とげとか悲哀ひがいの感興かんきようとでもいう思いがみちていた。まだ燈火あかりもつけずに、牛込うしごめでは、陋居ろうきよの主人しゅじんをかこんでお仲間の少壮文人さんごにんたちが三五人談話さんごにんの最中で、私がまだ座ざにつかないうちにたれかが、

「須磨子すまこが死しにました」

と夕刊を差出した。私はあやうく倒れるところであった。壁ぎわであったので支えることが出来た。それに何よりもよかったのは夕ゆうやみ暗が室へやのなかにはびこっていたので、誰にも私の顔の色の動いたのは知れなかった。死ねるものは幸福だと思っていたままだったなかを、グンと押しして他の人ほかが通りぬけていってしまったように、自分のすぐそばに死の門とびらが扉をあけてたおりなので、私はなちゆうちよんの躊躇もなく、

「よく死にましたね」

と答えてしまった。みんな慥然ぶぜんとして薄ぐらいなかに赤い火鉢の炭火を見詰めた。

「でも、ほんとに死ねる人は幸福じゃありませんか？ お須磨さ

んだって、島村先生だから……」

すこし僣越せんえつな言いかたをしたようだと思つたので私はなかばで言いさした。私は須磨子の自殺の原因がなんだかききもしないうちから、きくまでもないもののように思つていた。

「彼女が芸術を愛していれば死ぬるものではないだろうに……死ななくつたつて済むかと思われませぬ。財産もあるのだというから外国へでも行けば好いに」

電気が点くと、そう言つた人のあまり特長のない黒い顔を見ながら、この人は恋愛を解さないなと思つた。一本気で我執おしのかなり強そうだつたお須磨さんは、努力の人で、あの押おしきる力は極端に激しく、生死のどつちかに片附けなければ堪忍がまんできないに違い

ない。

「とにかくよく死んだ。是非はどうとも言えるが、死ぬものは後あとの褒ほう貶へんなんぞ考える必要はないから」

と言うものもあつた。死んだという知らせを電話で聞いて、昂こうぶ奮ふんして外へは出て見たが何処へいっても腰が座すわらないといつて、モゾモゾしている詩人もあつた。けれど、みんな理解を持つているので、芳川鎌子の事件の時なぞほど論じられなかつた。

「島村さんの立派な人だつたつてことが世間にもわかるだろう。須磨子にもはつきりと分つたのでしよう」

そんなことが繰返えされた。全く彼女は、島村さんの大きい広い愛の胸すがに縫ぬり、抱だかかれたくなつて追つていったのであろうと、

私は私で、涙ぐましいほど彼女の心持ちをいじらしく思っていた。連中が出ていってしまつてからも私はトホンとして火鉢のそばにいた。生いきている悩みを、彼女も思ひしつたのであろう。種々さまざまな、細こまかしい煩うるきさが彼女を取巻いたのを、正直でむきな心はむしろやくしやとして、共にありし日が恋しくて堪えられなくなつたのであると思つと、気がさものばかりが知るわびしさと嘆きを思いやり、同情はやがて我心の上になでかえつて来た。

抱ほうげつ月氏のおくやみにいったのも、月はかわれど今夜とおなじ時刻だと思ひながら、偶然におなじ紋附きの羽織を着て来たことなどを気にして芸術倶楽部の門を這はい入つた。秋田氏に導かれて奥

の住居の二階へといった。抱月氏のおりには芸術座の重立おもたつた人はみんな明治座へ行つていたので、座員の一人が、

「松井が帰りましたら申伝えます」

と弔問を受けたが、いるべき人がいないので淋しかった。それがいま、突然の死に弔られる人となろうとは夢のようだと思ひながら案内された。旧臘きゅうろう解散した脚本部の人たちの顔もみんな見えた。誰れもかれも落附かないで、空気が何処となく昂奮していた。

居間の前へくると杉戸がびつたりと閉切しめきつてあつた。室内では死デスマスク面をとつていたのであつた。次の室にも多くの人がいた。

手前の控室のようなどころには紅蓮洞ぐれんどう氏がしきりに気焰きえんをあげ

ていた。杉戸が細目に中から開けられて、お湯が入用だといったときに、座員の一人は紫色の瀬戸ひきの薬罐やかんをさげていった。洗面器が入用だというと身近く使われていたらしい女中が「先生のとくに一つつかってしまつて、一つしかないのだけれど」と、まごまごしていると、室のなかから水をなみなみと入れた洗面器をもちだして来てあけにいった。

（あの人の死骸しがいはこの杉戸一枚の向うにある）

引締つた心持ちで佇たたずんでいると、頭の底が冷たくなつて血が下へばかりゆくような気がした。何やら面倒な問題があつたと噂うわさされた楠山くすやま氏が側へ来たが、

「死ななくつてもよかつたろうと思うのですが……」といつて、

「これから郊外へかえるのは大変ですね」と話題をそらした。

洗面器のことで眩つぶやっていた年増としまの女中は杉戸の外にしゃがんでいたが、秋田さんが気附いたように、

「何か棺のなかへ入れてやるものでもないですか？　好きなものであつたとか、大事にしていたものであつたとか……忘れてしまふといけないから」

というのに、ろくに考えもせず、

「お浴衣ゆかたが着せてありますから、あの上へきよう経かたびらを着せればよいでございましょう。時計だの指輪だのというものは、かえつてとつてあげたほうがよろしいでしょうよ。ああしたお方りんごでしたから。島村先生の時にはお好きだからって、あの方が林檎りんごとバナ

ナをお入れになりました。ですから蜜柑みかんのすこしも入れてあげたらよろしゅうござりましたよう」と無ぞうさな事を言っていた。

素朴なのは彼女の平常であつたかも知れないが、名を残した一代の女優の、しかも若く、美しく、噂の高かつたロマンスの主であり、恋愛に生きた日を慕つて、逝いつた人を葬むるのに、そんな無作法なことつてないと腹はら立だしかつた。こんな女に相談をかけるとはと、秋田氏をさえ怨うらめしく思つた。死んだ女は詩のない人であつたが、その最後は美しく化粧けわいして去いつたというではないか、私は彼女に、第一の晴着はれぎが着せたかつた。思出のあるならば婚礼の夜の衣裳といつたようなものを、そしてあるかぎりの花で彼

女の柩ひつぎのすきまは埋めたかった。諸方から来る花環は前へ飾るよりも、崩くずして彼女の亡骸なきがらに振りかけた方がよいに、とも思った。(親身でもないに立入ったことは言われない)

そう思ったときに、生々としていて、なんの苦悶くもんのあとともめない死顔が目に見えるようであった。暗い寒い静かな明方あけがたに、誰れも気づかぬとき、床の間の寒牡丹かんぼたんが崩れ散ったような彼女の死の瞬間が想像され、死顔を見るに堪えなくなつて暇いとまを告げた。

秋田さんは玄関まで連立つて来ながら、

「あすこへね、あすこから卓テーブルと椅子いすを持って行って、赤い紐ひもで縊くびれたのです。ちゃんと椅子を蹴けつたのですね息をのんだと見えて口を閉じていたし、それは綺麗な珍らしい死方だそうです」

こういうおりに送り出されるのは忌むのが風習ではあるけれど、話しながら送りだされてしまった。

私は道を歩きながら彼女に逢ったおりの印象を思いうかべていた。舞台外では幾度と逢ったのではないが、いつでもあの人はキョトンとした鳩はとのような目付きで私の顔を眺めていた。文芸協会の生徒の時分もそうであつたし、芸術座の女王クイン、女優界の第一人者となつてからもそうであつた。貞さだ奴やつこが引退興行のときおなじように招かれて落ち合つたおり、野暮やぼなおつくりではあるが立派な衣裳になつた彼女は飾りけのないよい夫人おくさんであつた。田村たむら俊子としこさんが、

「何故なぜ挨拶あいさつしないのよ。だまって顔ばかり見ていてさ。一体知

っているの知らないの」

こう言っても、やっぱり丸い眼をして——舞台で見るのとはまるで違う、生彩のない無邪気な眼をむけて、だまって、どはず度外れた時分にちよいと首を傾かしげて挨拶とお詫わびとをかねたこつくりをした。それが私には大変よい感じを与えたのであった。可愛いところのある女だと思った。

自分のことと須磨子の事件とがひとつになつて、新聞を見ていても目の裏が火のように熱く痛くなつた。彼女が臨終七時間前に撮うつしたという「カルメン」の写真は、彼女の扮装ふんそうのうちでもうつくしい方であるが、心なしか見る目に寂しげな影が濃く出てい

る。どうした事かそのおりばかりは、写真を撮るのを嫌がって泣いたのを、例の我儘わがままだとばかり思つて、誰れも死ぬ覚悟をしてゐる人だとは知らないので、「そんな事をいわないで」といつて無理に撮らせてもらったのだというが、死の前に写した、珍らしい形見の写真になつてしまつた。きつと彼女の目のなかは、焼けるように痛かつたであらう。抱月氏の逝せい去きよされた翌日、須磨子は明治座の「緑の朝」の狂女になつていて、舞台上で慟どう哭こくしたときの写真も凄美せいびだったが、死の幾時間かまえにこんなに落附いた静美をあらわしているのは、勇者でなければ出来得ない。私は須磨子を生活の勇者だとおもう。

——誰れの手からも離れてゆくこの女の行途ゆくてを祝福して盛んに

してやりたいから、という旧芸術座脚本部から頼まれた須磨子のための連中は、七草の日に催されるはずであった。けれども見ることは出来ない。芝居の大入りつづきのうちに一座の女王クインが心静かに縊くびれて死んでしまうということは、誰れにも予想されない思いがけない出来ごとであつて、幾年の後、幾百年かの後には美しい美しい伝奇として語りつたえられることであろう。

その最後の夜、須磨子としては珍らしく白せりふを取り違えたり、忘れてしまつたりして、対手あいてをまごつかせたというが、そんなことは今まで決してない事であつた。舌がもつれて言いくい様子を不思議がつたものもあつた。カルメンの扮装をしたままで廊下にごごみがちに佇たたずんでいたというのは、凝じっとしては部屋にいられな

かつたのでもあつたらう。そしてホセに刺殺されるところは真に
せまつていたが、なんとなく悦んで殺されるようで、役柄とは違
つていたという。

内部のある人のいうには、一体に島村先生に別れてからは、芝
居のいきが弱くなつて、どうもいままでの役柄にあわなくなつて
いた。ことに今度のカルメンなどは、彼女に最も適した漂泊女ジプシイの
女であり、鼻つぱりの大層強い性格で、適はまりやく役でなければなら
ないのに、どうもいきが弱かつたと言つた。

彼女は死ぬ幾日かまえに、

「あなたはもつと真面目まじめに人生を考えなければいけませんよ」
といわれたときに、

「今にほんとに真面目になつて見せますよ」

と答えた。もうその時分から死ぬことについて考えていたのかもしれなかった。カルメンの唄うたう調子が低くつて音楽にあわなかつたというが、その心地をほつちりも洩らすような友人のなかつたのが哀れでならない。

後からきけば種々いろいろと、平常ふだんに變つたことが多くあつたのである。

抱月氏でなくとも、彼女を愛する肉親か、女友達があつたならその素振そぶりを見逃がさなかつたであろう。何か異状のあることと氣をつけていたに違いない。彼女は写真を撮るまえに泣いたばかりでなく、ひとり淋しく廊下たたずに佇んで床を見詰めていたばかりでなく、その日は口数も多くきかなかつた。夕食に樂屋一同へ天井てんどん

の使いものがあつたが、須磨子の好きな物なのにほしくないからとて手をつけなかつた。帰宅してからも食事をとらなかつた。夜更けてかえると冷るひえるので牛肉を半斤ばかり煮て食べるのが仕来りしきたになつていた。それさえ口にしなかつた。十二時すぎになると、抱月氏を祭つた仏壇のまえでひそひそと泣いていたが、それは抱月氏の永眠後毎日のことで、遺書は四時ごろに認したためられた。

最後の日の朝、洗面所を見詰めて物思いにふけていたというが、生前抱月氏は手細工てざいくの好きな人で、一、二枚の板ぎれをもてば何かしら大工仕事をはじめて得意でいた。洗面台もそうしたお得意の細工であつたのである。毎朝々々顔を洗うたびに凝じっと見詰めてはいるが、そのおりも何時いつまでも何時いつまでも立たつたままなので

風邪かぜをひかせてはいけないと、女中が気をつけに側へいったのに驚いて、歯を磨きだした。そしてその翌朝は、そのとなりの、新らしく建増たてました物置きへ椅子テールや卓を運んでいったのであった。つい隣りの台所では下女げじよが焚たきつけはじめていたということである。坪内つぼうち先生と、伊原青々園いはらせいせいえん氏と、親類二名へあてた遺書四通を書きおわたしたのは暁近くであつたであらう。階下の事務室に寝ているものを起して六時になつたら名宛あてのところへ持つてゆけと言附けたあとで、彼女は恩師であり恋人であつた故人のあとを追う終焉しゆうえんの旅立ちの仕度にかかつた。

彼女は美しく化粧した。彼女は大島の晴着に着代え、紋附きの羽織をかさね、水色繻しゆちん珍の丸帯をしめ、時計もかけ、指輪も穿は

めて、すっかり外出姿そとですがたになつて最後の場へ立つた。緋の絹きぬちぢ縮みの腰紐ひもはなめらかに、するすると、すぐと結ばれるのを彼女はよく知つていたものと見える。

あの人は變つている、お連合つれあいと口論したら、飯櫃めしびつを投りだして飯粒だらけになつていたつて——家がお堀ばたの土手下で、土手へあがつてはいけないという制札があるのに、わざと巡査のくる時分に駈上かけつたりするつて。ということ、まだ文芸協会の生徒の時分に聞いた。そのうち舞踊劇の試演があつて、坪内先生のいらつしやる楽屋にお邪魔していると、ドンドンという音がして近くで大きな声が出た。何だろうと思つてみると、

「正子まさこさんの白せりふのおさらいだ」

と説明するように傍あたの人が言ったが、四辺あたりにかまわぬ大きな声は、悪口をいえば瘋癲ふうてん病院へでもいったように吃驚びっくりさせられた。

今度の騒ぎで諸氏の感想を種々聴くことが出来たが、同期に女優になり、いまは「近代劇協会」を主宰している良人おつとの上かみやま山草そうじ人ん氏と御夫婦しておなじ協会の生徒であった山川やまかわ浦路うらじ氏の談話によると、生徒時代から須磨子は努力の化身のようで、手当り

次第に台本を持ってきて大きな声で白せりふをいったり朗読したりし、対あいて手があるうがなかるうがとんちやくなく、すこしの暇もなく踊ったりして、火鉢にあたっている男生の羽織の紐をひっぱっては舞台へ引出して対手をさせる。その人が労つかれてしまうとまた他の

人を引っぱりだしてやらせる。皆が嫌がると終しまいには一人で、オ
 フィリヤでもハムレットでも墓掘りでもやつてしまう。自分の役
 でない白でも狂言全体のを覚えこむという狂的な熱心さであった
 ということである。

生徒時代には身なりにとんちやくなく、高等女学校や早稲田大
 学出の人たちの間へはさまり、新時代の高級女優となつて売出そ
 うという人が、前まえ垂れがけの下から八百屋で買つて来た牛蒡ごぼうと人
 参じんを出してテーブルの上へのせておいたまま「これはお菜かずです」
 とその野菜をいじりながら雑誌を一生懸命に読出したということ
 や、他の生徒たちと一所に帰る道で煮豆やへ寄つて、僅わずかばかり
 の買ものを竹の皮に包ませ前掛けの下にかくし「これで明日のお

菜もある」といった無ぞうさや、納豆なっとうにお醤油しょうゆをかけないで食べると声がよくなるといわれると、毎日毎日そればかりを食べて、二階借りをしていたので台所がわりにしていた物干しには、納豆のからの苞苴つとが稲村いなむらのようなかたちにつみあげられ、やがてそれが焚附たきつけにもちいられたということや、卒業間近くなつて朝から夜まで通して練習のあつたおりなど、みんながそれぞれの弁当をとるのに、袂たもとのなかから煙の出る鯛焼たいやきを出してさつさと食べてしまうと、勝手にさきへ一人で稽古けいこをはじめたということなど、そうもあつたらうとほほえまれる逸話をいろいろと聞いている。

「須磨子は地方へゆくと、座員のお弁当まで受負うのですとさ。

一本十三銭五厘だつて。だつて、たしかな人がいうのですもの嘘ではない。それでね、おおふんぱつ大奮発で手製なのですつて、お手伝いをさせられるものは大弱りだわ。みんながよく食べるかつて？ ううん、まず不味くつていやだというものが多いから、おおも大儲かりなの。だつて自弁は御勝手に、つまり芸術座から、まかない賄費用が出るのだから。手つとりばやく芸術座の儲けの幾分が、女優須磨子の利益の方へ加わるだけの事だから。そしてね、おかずは何だと思ふの、毎日油揚げの煮付け」

いまは外国へいった友達がはなした。私たちは「まさか！」といつて笑っていたが、ある夜は、芸術倶楽部の居間を訪れての帰りがけに立寄った人が、

「大変先生も機嫌がよかった。いま一杯やるところだからと進められたが、お須磨さんが土瓶どびんをもっているからなんだと思ったら、土瓶でお爛かんをして、献酬けんしゅうしているところだった」

こま細かいことには無頓着むとんちやくな須磨子の話しをした。極ごくく最近、

地方興行が当って、しかもこの次からは松竹の手で興行をするようになるので、万事そうした方の心配がなくなるというような、芸術座の前途が明るくなった話しのつづきに、

「こんどの地方興行が当ったので、島村さんもいくらか楽になったので、座の会計の都合が悪かったときに、電話を担保にしてお須磨さんから借りた金を、返そうといったらば、彼女がいうのは、あの時分より電話の価ねがあがっているから、あれだけでは嫌

だというので、それでは止めようとそのままになってしまった」と言つた。それこそ私は根もないことだろうと打ち消すと、

「ほんとなのですよ。先生は貧乏——つまり芸術座は貧乏でも、お須磨さんは財産をつくつていゝのです。かなりあるのです」といいはつた。奮闘克己という文字に当あてはま嵌まつた彼女だ。

二

傲慢ごうまんなほど一直線であつた彼女の熱情——あの人の生き力は、前にあるものを押破つて、バリバリとやつてゆく、冷静な学者の魂たまに生なま々なましい熱い血潮をそそぎかけ、冷凍こおつていた五臓に若々

しい血を湧返えらせ、絶ず傍らから烈しい火を燃しつけた。彼女は掌握つかみしめてしまわなければ安心することの出来ない人であった。そうするには見得みえも嘲ちやうしやうも意にしなかった。そのためには抱月氏がどんな困難な立場であろうとかまわなかった。彼女の性質は燃えさかる火である、むかつ気である。彼女に逢ったときにうけた顔の印象には、すこしの複雑さも深みも見られなかった。彼女は文芸協会演芸研究所の生徒であった時分に、山川浦路さんに英文の書物のくちやくちやになつたのを見せて、

「英語を教わつて癩かんしゃく癩しゃくがおこつたから、本を投げつけちやつた。出来ないから教えてもらうのに、良人がいくらおしえても解らないなんて言うから」

といったそうだ。抱月氏と同棲どうせいしてからも激しい争闘せうとうがおりおりあつたとかいうことである。向いあつているときはきつと何か言いいいになる。頬ほつぺたへ平打ちひらうちがゆくと負けていないで手をあげる。そうしたことはちよつと聴くと仲が悪いようにきこえるが、喧嘩けんかもしないような家庭が平和で幸福があるとばかりはいえない。激しい争闘のあとに、理解と、熱い抱擁だうようとが待つていともいえる。

「奥さんがもすこしなんだつたら——坪内先生の奥様ののように優しく、なにかのことを気をつけてくださるようだといいのだけれど……」

こういつた須磨子は自分勝手だつたかも知れない。そうはいっ

でも須磨子自身も、先方の思いやりなどはちつとも出来ないたちで、噂だけか、それとも誠のことか、ある時抱月氏の令嬢たちに手紙をやつて、これから貴女あなたがたは私をお母さんと思わなければなるまい、といったとか、自信も勇氣も、過ぎると野猪いのししのむこうみずになるが、彼女が脱線したのには一本気な無邪気さもある。かつて私はあの人の芸が、エネルギッシュ精力的いけいで力強いのを畏敬したが、粗野なのに困るといふ気持ちもした。感情も荒つぽいので、どうしてもあの人とならんで、も一人、繊細な感情の持主であり、音楽的波動で人にせまる、詩ポエティカル的ポエティカルな女優がなくてはならないと思つていた。陶冶とうやされないあの駄々だだっ子こは、あの我儘が近代人だといえはそうとも言われようが、気高い姿体と、ロマンチックな風

致をよろこぶ女にも、近代人の特色を持った女がないとは言われない。

ひたぶるに突進んでいって、突きあたる壁のあつたのをはじめて発見したのだ。彼女が勢力にまかせて押退けたおりには、奥深くへと自然に開けていった壁が——何の手ごたえもない幕のように見えた壁が、かんぺき巖壁のように巍然と聳えたつていて、はじ弾き飛ばした。彼女ははじめて目覚めて、鉄のように堅く冷たい重い壁をせんしゅ織手をのべて打叩いて見た。そしてその反響は冷然と響きわたり、勝手にしろと吼えた。そのおりには、もう彼女の住む広い胸はなかった。底知れなかった愛人の情をしみじみとさとり知つたおり、そこに偉大な人格をしの偲ばなければならなかった。

傲慢な舞台、中ごろが一番激しかった。ことに幕切れなどは、
傍若無人ぼうじゃくぶじんという難をまぬがれないおりもあつて、見ていてさ
えハラハラしたものである。女王に隸属するのは当り前ではない
かといった態度が歴然としていた。最後までそれで通して行こう
としたのが、何か気が阻はばんだのだ。一本気だけに絶望の底は深か
つた。

彼女が大層他人ひと当りがよくなつたという事を聴いたのもかなり
前のことで、抱月氏のお通夜つやの晩に、坂本紅蓮洞ぐれんどうの背中を、立
つたまま膝ひざで突つくものがある。冬のはじめの、夜中のこととて、
紅蓮さんは暖まるものを飲んでいた一杯気嫌で、

「誰だ」

と強くいつて振りむいて見ると、須磨子がうつむき加減に見おろして、

「どいてくれない？」

その座にかわっていたいのだという。末席の後の方だったので、やっぱり棺の側にいた方がよかろうという、

「でも、あの女が私の方ばかりじろじろ見ているのだもの」

と島村未亡人の方を指差したということである。我儘ものだが、どこかにしおらしい、自分から避ける心持ちも持っていたのである。

でも彼女は、島村氏の令嬢たちが芸術座へせいかつひ生計費を受取りに来たとき優しくは扱わなかった。門前払い同様にしたといわれ、

ずっと前の家では格子戸こうしどを閉たてきり、水をぶっかけようとしたこともあるという。それは何かしら心の安定を失っていたときと見た方がよからう。でなければ、いかに仲に立った人が適當の処分をし、よく斡あっせん旋したからとて、抱月氏の死後、彼女が未亡人や遺孤いこに対して七千円を分割し、買入れた墓地まで、心よく島村家の人たちに渡してしまはずはない。

「私もこの墓地へはいるのだから」

彼女は墓地の相談のときにこういつていたそうである。島村家へ渡したといつても、自分が買って、大切な先生の遺骨ほねを埋めたところゆえ、自分のものだという心持ちでいたのであろう。それでも不安心なところもあつたかして、その隣地の背面あきちの空地を買

つておこうと呟つぶやっていた。けれど誰れがそのおり須磨子の心の
どん底に、死ぬことを考えてもいたと思いつく道理はなかった。

抱月氏は須磨子のために全部を奪われてしまっているものだと
さえ思われたが、ある興行師は須磨子にむかつて、

「も一ひともう儲けするのなら、抱月さんと別れて見せることだ。人気
が湧わけば金もはいる」

といったとやら。金、金、金……利殖よりほか楽しみのないもの
のようにいわれた彼女が、女優生活の十年に残しえた三万円を捨
ててかえり見ず、縊くびれ死んでしまって、そういう人たちに啞然あぜんと
させたのは痛快なことではないか。

「死んだときいたら、嫌だったことはさらりと消えてしまって、

ほんとに好い感情を持つことが出来た。何だかこう、昨夕^{ゆうべ}まで濁つていた沼^{おも}の面^{けさ}が、今朝起きて見ると、すっかりと澄みわたっている。夢ではないかと思うような気がする。僕はそんな心持ちがするといったら、N氏もほんとにそうだ、私もそういう気持ち^{ちがしたと言った}がしたと言った」

と抱月氏とも須磨子とも交りのふかかったA氏が話された。そのおりに言葉のつづきで、

「あの人は死によつて、あの人の生活を清浄なものにした」

「あの人のぐらい自然な感じのする死はない」

「僕はもうすこしあの人を親切にしてやればよかつた」

讚美と感激ののち、沈黙がつづいたはてに、突然ある人が、

「しかし、松井君は随分憎らしかつたね」

と言出すと、その一言ひとことでその座の沈黙が破れて、その言葉に批判があたえられずに、

「そうだ。やっぱり憎らしい人だったね」

と前の讚美とおなじように連発された。その二つの、まるで異ちがつた意味の言葉は、一致しそうな事でありながら、松井須磨子の場合には不思議に一致して、

（立派な死しにかた方かたをした、しかし随分憎らしい記憶をおいていつてくれた人だ）

これが須磨子を知っている人の殆ほとんどが抱いだいた感じではなかつたろうか、この偶然の言葉が須磨子の全生涯を批評しているよう

だといわれた。

あの人は怒っているか笑っているか、どつちかに片附いている人だったが、泣くということがふえて、死ぬ前などは、怒っているか、笑っているか、泣いているかした。

「先生と私との間は仕事と恋愛が一緒になったから、あんなに強かったのよ」

といい、

「私がほんとうに家庭生活というものを知ったのはこの二、三年のことですよ、先生もほんとに愉快そうですわ」

といたりした彼女が、泣虫になったのはあたり前である。むしろ笑いが残っていたのが怪しいほどだ。

恋人と緑の朝の土になり

と川柳久良岐せんりゆうくらぎ氏は弔した。「緑の朝」は伊太利イタリーの劇作者ダヌンチオの作で「秋夕夢」と姉妹篇であるのを、小山内薫おさないかおる氏が訳されたものである。どうしたことかこの「緑の朝」には種々の出来ごとがついて廻った。最初去年の夏、帝劇で市村座連の出しものであつたとき、劇評家と、狂主人公に扮した尾上菊五郎おのえとの間に、何か言葉のゆきちがいから面白くないことが出来て、菊五郎の芝居は見るの見ぬのとの紛紜いざいざがあつた。小山内氏は訳者という関係ばかりではなく、市村座の演劇顧問という位置からしても、舞台上の酷評には昂奮こうふんしないわけにはゆかなかつた。それから間もなくその舞台装置の責任者であつた、洋画家 小糸源太郎こいとげんたろう氏が、

どうしたことか文展へ出品した額面を、朝早くに会場へまぎれこ
 んで、自分の手で破棄したことにつき問題が持上り、小糸氏は將
 来繪筆をとらぬとかいうような事が伝えられた。口さがない樂がくや
すずめ屋雀はよい事は言わないで、何かあると、緑の朝ですかねとい
 うような反語を用いた。その評判を逆転しようとしたのが松竹會
 社の策略であつた。松竹は芸術座を買込み約束が成立すると、そ
 の魁さきがけに明治座へ須磨子を招き、少壯氣銳の旧派の猿えんのすけ之助すみや寿美
ぞう蔵えんじやくや延若たちと一座をさせ、かつてとかく物議ぶつぎの種たねになつた
 脚本をならべて開場した。

二番目には寿美蔵延若に、谷崎潤一郎作の小説の「お艶殺つやし」
 をさせることになつた。これは芸術座が新富座しんとみざで失敗した狂言

である。お艶を須磨子が、新助は沢田正次郎さわだしやうじろうが演じて不評で、その後直じきに沢田が退座してしまつたのを出させ、その代りに中なかま幕くへ「崇たられるね」というような代名詞につかわれている「緑の朝」を須磨子に猿之助が附合つきあうことになつた、無論菊五郎にはめ、男にした主人公を原作通り女にして須磨子の役であつた。

稽古けいこの時分に須磨子は流行の世界感冒せかいかぜにかかつていた。丁度私わたくしが激しいのかかつて寝付ねいといるとA氏が見舞みまに來られて、私が食事しょくじのまるでいけないのを心配して、島村さんも須磨子も寝ているがお粥かゆが食たべられるが、初日はつじつが目の前まへなので二人とも氣きが氣きでなさそうだとも言つていられた。二人とも日常ひんじつ非常に壯健じやうけんなので——病わづらつても須磨子が頑健がんけんだと、驚おどいているといつてい

たという、看病人の抱月氏の方がはかばかしくないようだった。

どうにか芝居の稽古までに癒なおった彼女は、恩師を看みとる暇もなく稽古場へ行った。

十一月四日の寒い雨の日であった、舞台稽古にゆく俳優たちに、ことに彼女には細かい注意をあたえて出してやったあとで抱月氏は書生を呼んで、

「私は危篤らしいから、誰が来ても会わない」

と面会謝絶を言いわたした。出してやるものには、すこしもそうした懸念をかけなかったが、病気の重い予感があったのだった。

慎しみ深い人のこととて苦しみは洩もらさなかつた。かえつて、すこし心持ちがよいからと、かわや廁にも人に援たすけられていった。だが梯はしご

子段だんを下おりるには下りたが、登るのはよほどの苦痛で咳せきい入り、それから横になつて間もなく他界の人となつてしまった。

不運にも、その日の「緑の朝」の舞台稽古は最後に廻された。心がかりの時間を、空むなしく他の稽古の明くのを待つていた芸術座の座員たちは、漸ようやく翌日の午前二時という夜中に楽屋で扮装を解いていると、

「先生が危篤ということです」

と伝えられた。取るものも取りあえず駈かけもど戻つたが、須磨子は自用の車で、他の者は自動車だったので、一足さきへついたものは須磨子の帰るのを待つべく余儀なくされていると、彼女はすすりなきながら二階へ上つていったが、忽たちまちたまぎる泣声なみこゑがきこえた

ので、みんな駈上った。

彼女は死骸しがいを抱いたり、撫なでさすったり、その廻りをうろろうろ廻ったりして慟哭どうこくしつづけ、

「なぜ死んだのです、なぜ死んだのです。あれほど死ぬときは一緒だといったのに」

と責せめるように言つて、A氏の手を振りまわして、

「どうしよう、どうしよう」

と叫び、狂うばかりであつた。どうしても、も一度注射をしてくれといつてきかないので、医者えとくは会得のゆくように説明のかぎりをつくした。

「あんまりです、あんまりです。どうにかなりませんか？ どう

かしてください。これではあんまり残酷です」
狂い泣きをつづけた。

三

神戸に住む擁護者パトロンのある貴婦人に須磨子がおくった手紙に、

私は何度手紙を書きかけたか知れませんが、あたまが変
になっていて、しどろもどろの事ばかりしか書けません。一
度お目にかかつて有ありったけの涙をみんな出さして頂きたいよ
うです。

奥様、役者ほどもじめな者は御座いません。共とも稼かせぎほども

じめな者はございません。私は泣いてはおられずあとの仕事をつづけて行かなくてはなりません。今の芝居のすみ次第飛んでいって泣かして頂きたいのですけれども、仕事の都合でどうなりますやら……

奥様、私の光りは消えました。ともし火は消えました。私はいま暗黒の中をたどっています。奥様さっして下さいませ。

「私は臆病なため死しにおく遅れてしまいました。でも今の内に死んだら、先生と一緒に埋めてくれましょうね」

笑いながら、じょうだん戯言にまぎらしてこう言ったのを他の者も軽くきいていたが、臆病と言ったのは本当の気臆きおくれをさして言った

のではなくって、死にはぐれてはならない臆病だったのだ。適当の手段を得ずに、浅間しく生いき恥はじか死し恥はじをのこすことについての臆病だったのだ。一番容易に死ぬことが出来て、やりそくないのない縊い死しをとげるまで、臆病と自分でもいうほど、死の手段を選んでいたのだ。

座の人たちが思いあたることは、この春の興行に、「ヘツダガブラア」が候補になったところ、彼女はどうしても嫌だと言張った。ヘツダのようなあんな烈しい性格のものばかりやるのは嫌だといつてきかなかつた。その時の反対のしかたが異状だったので、脚本部の人たちも驚いていたのだが、いま思えば自殺の決行について絶えぬ闘争があつたのではなかつたかと言っている。ヘツダ

は最後にピストルで自殺する役である。それかあらぬか、それよりもすこし前に彼女はピストルを探して、弾丸たまだけ探しだして、「先生のピストルは何処へやちやつたのだろう。いくら探しても見つからない。私が死にやしないかと思つて誰れか隠したのよ」と呟つぶやいていたそうだ。

彼女に近い人のなかには泣かれ役という言葉があつた。青い布をかけた卓テーブルの上に、大形おおがたの鏡がおいてある室へやが彼女の泣き室なのであつた。彼女は孤独でいる時は、その鏡のなかへ具合よく写つてくる壁面上にかけた故人の写真を見ては泣いている。人がはいつてゆけば、その人を対手あいてにして尽つきることなく、綿めん々と語り、悲嘆にくれるので、慰めようもなく、捕虜になるのは禁物だと

敬遠しあつたほどだつた。

かつ子にわか子という二人の養女は、まだやつと十二、三位で二人とも郷里くにの親戚しんせきから来ている。

も一人いつぞや「人形の家」のノラを演じたときに、幼ない末子を勤めた女の子があつた。あれは松井の子だつたのではないかしら、あんまりよく似ているというようなことを、今度その少女むすめも葬式に来たときに内部の人は言つた。しかしその少女のことは遺書にはなかつた。二人の養女にもよい具合にしてやつてくれと書いてあつただけである。かつ子といつた方が相続者になつたが、須磨子の母親のいしという、七十の老女が後見人になり、縁類の某海軍中將がその管理人になつた。そして彼女の一七日がすむ

と、雪深い故郷の信州へと帰っていった。残された建物——旧芸術倶楽部——故人二人の住んでいた記念の建物はどうなるのやら、そのまま帰ってしまった。

デスマスク 死 面は、彼女の生はえぎわ際の毛をすこしつけたままで巧妙に出

来上ったそうで、生いきているときより可愛らしい顔だといわれた。

可愛らしい顔といえ、彼女の愛あいきよう敬のある話をきいたこと

がある。彼女はあるおり某氏をたずねて、女優になりたいが鼻が低いからとしきりに気にしていた。そこで某氏はパラフィンを注射した俳優に知しりあい合のある事をはなして、そんな例もあるから心配するにも及ぶまいという、彼女はその俳優の鼻が見せてもらいたいといいだしたので連れてゆくと、やっと安心してその後注

射した。

鼻の問題ではも一つ面白い挿話エピソードがある。佐藤（田村）俊子さんが、文芸協会の女優になろうとしたことがある。女史は充分に舞台を知っているうえに、遠くない前に本郷座ほんごうざで「波」というのを演やって、非常な賞讃を得た記憶が新しかったから、気まぐれではなかったのにどうしたことが中止してしまった。ある日そのことを言出して、噂うわさは嘘だったのか本当だったのかと聞くと、「嘘のことはない。やろうと思ったから行っただけけれど中止やめしてしまったの。だって、須磨子の鼻を見ていたら——鼻の低いものが寄合ったってしようがないじゃないの」

あの女史はポンポンと言ってしまったけれど、口のさきと心の

底と、感じたものとおなじであつたかどうかはわからない。感覚の鋭い女史が、激しい気性の須磨子と上になることも下になることも出来にくいと、見てとつたと思うのは推測にすぎるかもしれないが、低い鼻という愛敬にかたづけてしまつた俊子女史の機ウイツ智トもおもしろい。いま米アメリカ国の晚香波バンクーバーに新しい生涯を開拓しようとして渡航した女史のもとに、彼女の訃ふがもたらされたならばどんな感慨にうたれるであろう。

須磨子の年老とつた母親は他人が悔みをいつたときに、「どうせ死神につかれているのですから、今度死なくなつたつて、何処かで死んだでしようから」と諦あきらめよく言切つたそうである。

彼女の故郷は？　そうした母親の懐ふところ！　彼女が故郷への初興行は、たしかズウデルマンの「故郷」のマグダであつたかと思う。そのおりの名声はすさまじいもので、県の選出代議士某氏は、信州から出た傑物は、佐久間象山さくましようざんに松井須磨子だとまで脱線した。けれどその須磨子の幼時は、故郷の山河は人情の冷たいものだといふ観念を印象させたに過ぎなかつたのだ。

長野県埴科郡松代はにしなごおりまつしろざい在、清野村きよのむらが彼女の生れた土地で、

先祖は信州上田の城主真田家さなだの家臣、彼女の亡父も維新のおりまで仕官していた小林藤太という士族である。芸術倶楽部の一室に、九曜の星の定紋のついた陣笠じんがしがおいてあつた。幕府の倒壊と共に主と禄ろくに離れた亡父も江戸に出て町人になつたが、馴なれぬ士族の

商法に財産も空しくして故山に帰^かえった。

信州の清野村に小林正子の彼女が生れたのは、明治十九年の十二月で八人の兄と姉とを持った末子であつた。六歳^{むっつ}のときに親戚にあたる上田市の長谷川家へ養女に貰われていった。小学校時代から勝気で、男の児^こに鎌を振りあげられて頭に傷を残している。十六歳の時になつて不幸は萌^{きざ}しはじめた。養父の病死に一家は解散し、誠の母親よりも慈愛に富んでいた養母とも離れることになつた。実家に引き取られ、その年の秋には、実父にも別れた^{わずか}。僅^{わずか}の間に二人の父を失つた彼女は、草深い^{かたいなか}片田舎に埋もれている気はなかつた。姉を頼りにして上京したのが、明治卅五年の四月、故郷^{ふるさと}の雪の山々にも霞^{かすみ}たなびきそめ、都は春たけなわのころ、

彼女も妙齡十七のおりからであつた。

彼女が頼みにして来た姉の家は麻布飯倉あざぶいぐらの風月堂という菓子舗やであつた。義兄の深切で嫁ぐまでをその家でおくることになつたが、姉夫婦は鄙少女ひなおとめの正子を都の娘に仕立てしたてるにかかり、氣の強い彼女を、温雅な娘にして、世間並みに通用するようにと、戸板裁縫女学校を選えらまれた。

彼女が後に文芸協会の生徒になつて、暫時ひとりみ独身でいたとき、乏しいながらも二階借りをして暮してゆけたのは一週に幾時間か、よその学校へ裁縫を教えにいつて、すこしばかりでもお金をとる事が出来たからで、その時裁縫女学校へ通つたという事はかの女じよの生涯にとつて無益むだなものではなかつた。

都の水で洗いあげられた彼女は風月堂の看板になった。——彼女は美しい、いや美人ではないということが時々持ちだされるが舞台ではかなり美しかった。厳密にいったなら美人ではなかつたかも知れないが、野ワイルド性チャームな魅力タイプが非常にある型だ。

正子が店に座るとお菓子よが好く売れるという近所の評判は若い彼女に油をかけるようなものであつた。縁談の口も多くあつたが断るようになっているうちに、話がまとまって彼女は嫁とついだ。十七歳の十二月はじめに上総かずさの木更津きさらづの鳥飼とりかいというところの料理兼旅館の若主人の妻となつた。

彼女はどこまでも優しい新妻にいづまであり、普通の女らしい細君であつたが、信州の山里から出て来たのは、こんな片田舎の料理店

の細君として納まってしまふ約束であつたのであろうかと思わぬわけにはゆかなかつた。それに彼女の故郷の風習と、木更津あたりの料理店の女将おかみである姑しゅうとめの仕来りしきたとは、ものみながしつくりとゆかなかつたその上に、若主人は放蕩ほうとうで、須磨子は悪い病氣になつたのを、肺病だろうといふことにして離縁された。

……私は思う。勝気な彼女の反撥心はんぱつしんは、この忘れかねる、人間のさいなみにあつて、弥いや更に、世よを経るふには負まじ魂たまを確固しつかりと持たなければならぬと思ひしめたであらうと——

嫁入つてたつたひとつき一月、弱まりきつた彼女はまた飯倉の姉の家にかえつてきた。健康が恢かい復ふくして来ると、五年の星霜せいそうは、彼女には何かしなければならぬといふ欲求が起つて来た。

正子が松井須磨子となる第一歩は、徐々に展開されるようになった。彼女に結婚を申込んだ人に前まえざわ沢誠助せいすけという青年があつた。高等師範に学んでいたが、東京俳優学校の日本歴史教師を担任していた。俳優学校というのは、新派俳優の故参、藤沢浅次ふじさわあさじ郎ろうが設立したもので、そのころ米国哲学博士の荒川重秀氏あらかわしげひでも新劇団を起し、前沢はその方にも関係を持っていた。その青年の求婚は須磨子の方でも気が進んだのであろう。前沢の乏しい学生生活に廿二歳の正子という華やかな色彩が加わつた。

堅気かたぎの家に寄宿して、出京しても一度も芝居を見なかつた若い細君の耳へ、毎日毎日響いてくるのは、劇に新生面を開いてゆかなければならないと、論じあう若き人々の声ばかりであつた。新

時代の要求は立派な女優であるというような事も響いた。良人のおつと前沢は妻にもそれを解らせようとした。彼女も知らず知らずにかされて女優修業をしようと思ひ立つた。前沢の關係のある俳優学校は女優を養成しなかつたので、坪内先生の文芸協会へはいることになつた。

当時、文芸協会の女優生徒の標準は高かつた。英文学の講義、英語の素読というような科目もあつた。彼女は試験委員の一人であつた島村氏の前へはじめて立つたおり、島村氏はじめ他の委員も彼女の強壯なものと、音声の力強いのと、からだ体軀の立派なのに合格としたが、英語の素養のないので退学させられるということになつた。

彼女の異状な勉強はそれから始まる。彼女は二つのおなじ英語の書籍を持って、一つにはすっかりと一字一字仮名をつけ、返り点をうち、鶺鴒^{うの}呑みの勉強をはじめた。教える方が面倒なために持てあますほどであった。その熱心さが坪内博士を動かして、特別に別科生として止まる事が出来たのであった。彼女は熱心と精力のあるかぎりをつくしたのでABCもよく出来なかつたのが三ヶ月ばかりのうちに、カッセル版の英文読本をもつてシエクスピアの講義を聴くことが出来た。他の生徒に負けぬように芝居に関する素養も造っておこうというので、学校の余暇にはますもとぎよし榎本清について演芸の知識を注入した。

文芸協会の第一期公演は、第一期卒業の記念として帝国劇場で

開催された。それが須磨子にも初舞台である。多くあつた女生じよせいもその時になると山川浦路うららじと松井須磨子とだけになっていた。ハムレット劇の王妃ガートルードは浦路で、オフィリヤは須磨子であつた。それは明治四十四年の五月のことで、新興劇団の機運はまさに旺盛おうせいの時期とて、二人の女優は期待された。

廿五歳になつたおり卒業を前に控えて彼女の第二の離婚問題はおこつた。自分の天分にぴつたりとはまつた仕事を見出すと、彼女の倨傲きよごうは頭を持上げはじめた。勝気で通してゆく彼女は氣に傲おごつた。それに漸ようやく人物の価値ねうちの分るようになった彼女は前沢との間が面白くなくなりだした。満されないものがはびこりはじめた。良人との衝突も度重たびかさなつて洋燈らんぷを投げつけるやら刃物はものざんま三一

味などまでがもちあがった。とうとう無事に納まらなくなってしまうた。その間に彼女は卒業した。

ヒステリー気味な所作しうちは良人へばかりではなかつた。同期生の男たちが、山出やまだとか田舎娘などでも言つたら最期さいご、学校内でも火鉢が飛んだりする事は珍らしくなかつたのである。けれども気性のしつかりしているのも群を抜いていたという。一度言出したことは先生の前でも貫こうとする。そういつた気性が女王クイーンになつた芸術座でもかなり人を困らせたのだ。

彼女もまた時代が命令して送りだした一人の女性である。たまたま彼女が泰西たいせいの思想劇の女主人公となつて舞台の明星スターとなつたときに、丁度我国の思想界には婦人問題が論ぜられ、新しき婦

人とよばれる若い女性たちの一団は、雑誌『青鞥』せいとうを発行して、しきりに新機運を伝えた。すべて女性中心の渦は捲き起り、生々とした力を持って振り立つた。その時に「人形の家」のノラに異常な成功をした彼女は、驚異の眼をもつて眺められた。彼女の名はあがつた。

ある夜更けよふに冷たい線路に佇たずみ、物思いに沈む抱月氏を見かけたというのもそのころの事であつたらう。ノラの舞台監督で指導者の抱月氏に、須磨子が熱烈な思慕を捧たげようとしたのもその頃のことであつた。

恋と芸術の権化ごんげ——決然と自己を開放した日本婦人の第一人者

——いわゆる道徳を超越した尊敬に値いする人——『須磨子の一生』の著者はそう言っている。

彼女は猛烈に愛した。彼女はその恋愛によつて抵抗力を増した。けれど抱月氏の立場は苦しかった。総てすべのものが前生活と名をかえてしまった。家庭の動揺——文芸協会失脚——早稲田大学教職辞任——

彼女にも恩師であつた坪内先生の、畢ひっせい世の事業であつた文芸協会はその動揺から解散を余儀なくされてしまった。島村氏も先生にそむいた一人になつた。

嫉視しつし、迫害、批難攻撃は二人の身邊を取りまいた。抱月氏の払つた恋愛の犠牲は非常なものだったが、寂しみに沈みやすいその

心に、透間すきまのないほどに熱を焚たきつけていたのは彼女の活気であつた。そして抱月氏いぎが生いる道は彼女を完成させなければならなかつた。かなり理解を持つているものですら、学者は世間見ずのものであるが、ああまで社会的に墮落してゆくものかとまで見られもした。貨殖かしよくに忙せわしかつた彼女が種々いろいろな客席へ招かれてゆくので、あらぬ噂さえ立つてそんな事まで黙許しているのかと蜚語ひごされたほどである。「緑の朝」のすぐ前に、歌舞伎座で「沈鐘ちんしよう」の出されたおり楽屋のものが、

「あの人はあれで学者の傑えらい先生なんですつてね、男衆おとこしゆかと思つたら」

そんなに見縊みくびられても黙々と、所信の実行を示すだけであつた

が、芸術座と松竹会社との提携が成立したので、これからこそ島村氏の学者としての復活だと予想されたおり忽然こつねんとして永眠されてしまった。座員、脚本部員、事務員と、島村氏のもとに統率された芸術座もその年の暮にはまず脚本部が絶縁し、芸術座は解散し、須磨子一座ということになってしまった。

オフイリヤで狂乱の唄うたをうたい、カチューシャでさすらいの唄から、一段と世間的に須磨子の名は広まった。行ゆこうかもどろかオロラの下へ——という感傷センチメンタル的な声は市井しせいの果はてから田舎人のだみごえ訛なまり声にまで唄われるようになった。そして最後にカルメンの悲しい唄を残して彼女は逝いった。流行唄はすぐさまこんなふうに悲しい彼女の身の上を唄った——

君に離れてわしや薔薇ばらの花。濡ぬれてくだけてしおしおと、うべさびしい楽屋いり入かつら、鬢衣裳も手につかず、

幕おの下りると待ちかねて、すすり泣くぞえ舞台裏——

彼女の葬式はすべて抱月氏のものにならっておこなわれた。日も時刻も何もかもみんなおなじようであつた。ただ柩ひつぎに引添う彼女が見られなくなつたばかりで、式場の光景は一層盛大で、数々の花環に取りかこまれ、名ある新旧俳優も列し、弔辞が捧げられた。けれども彼女が遺書の中に繰りかえし繰りかえして頼んでいった抱月氏との合葬のことは問題になつた。坪内先生の説は並べて墓を建てたらといふので、それには未亡人も、

「坪内先生のおっしゃる事にはそむかれない」

と許したのであったが、かえって彼女の親戚側の方から、

「島村氏と一緒にいたことさえ良いとは思わなかったのだから」と頑迷がんめいなことを言出したため、彼女がとっておいた島村氏の遺髪と一所に葬ることにして、遺骨は信州へ持ちかえられた。彼女ほどに透徹した人生をおくったものが、墓地などの形式を気にかけたのはおかしいが、古来の伝説や何かに美化されたものを思いだしたのもあろう。

彼女はなぜ何故死んだ、芸に生きなかつたかとは言いたくない。彼女には宗教もない、彼女の信仰は自分自身であつたのであろう。その本尊ほんぞんが死を決したときに芸術も信仰も残らぬはずである。楠山氏への偏愛問題とかが脚本部動揺の基もとになつていたようであ

つたが、彼女がこの後いくら生きていて誰れに愛を求めようとも、抱月氏の高さ、尊さが、胸に響きかえってくるばかりで、決して満足のあるはずはない。かの女の死は当然のことである。

私は彼女のことを詩のない女優といったが、あの女の死は立派な無音の詩、不朽な恋愛詩を伝えるであろう。ほんとに死しにどころ 処ころを得た幸福な人である。

松井須磨子の名は、はじめて芸名をさだめる時に、印刷物の都合でせきたてられたとき、松まつ代しろから出たのだから松代須磨子としようといったら、傍から、まつしろ（真白）須磨子ときこえると茶化したので、それでは松井にしようといった。するとまた、

まずい須磨子ときこえるといった。けれど「まずくつても好い」と小さな紙裂れ^{かみき}へ書いて出したのが、大きな名となつて残るようになった。

とはいえ彼女はやっぱり慾張つていた。死ぬまで大芝居^{おおしばい}を打つて、見事に女優としての第一人者の名を贏得^{かちえ}ていった。乏しい国の乏しい芸術の園に、紅蓮^{ぐれん}の炎が転^{ころ}がり去つたような印象を残して――

——大正八年四月——

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1919（大正8）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松井須磨子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>